

## 新しい「出会いの場」としての講義

全学共通教育推進機構長 高瀬 武典

企業経営に関する講義科目を担当している関係で、人間の「やる気」を引き出すにはどうすればよいか、という話をするところがある。受講生の「やる気」を引き出すのにそれほど成功しているとも思えない自分がこういう解説をするのも後ろめたいので、今年は学生に対して「あなたは、どういうときに『やる気』を感じますか？また、それはなぜですか？」と質問して回答を書いてもらった。1年次配当専門科目の入学直後の授業で質問したのであるが、やる気を感じる対象として一番多かったのが「アルバイト」、その次が「部活動、サークル」などであり、授業や勉学に関するものはさらにその次であった。

では、学生諸君はなぜそれらのことに「やる気」を感じるのだろうか。経営管理や産業社会学の理論では、労働者の「やる気」を引き出すために、賃金体系や人間関係への配慮や自己実現などをあれこれと試そうとする。けれども、今回の学生諸君が重視していたのは「お金」でも「人間関係」でもなく、圧倒的に「新しさ」であった。

たとえば、高校生のときにはできなかったアルバイトに新しくチャレンジしている、部活動で新しい人間関係を結び始めたところである、サークルに入って新しいスポーツに打ち込んでいる、初めて出会った第二外国語に興味を感じて勉強している…等々。上位年次生も、「就職活動にやる気がある——就職面接によって日々新しい発見があるから」、「部活動にやる気を感じる——今まで幹部をやってきた先輩方が引退して自分たちが新たに運営に責任をもつようになったから」といった具合である。

たった一度の質問から一般化するのは無理かもしれないが、学生のやる気を引き出すうえで「新しさ」の重要度がどんどん増してきているように思う。これは、講義科目において、学生の積極的な学習態度をいかに引き出すかという問題にも深くかかわってくるだろう。ここで私が言いたい「新しさ」とは、授業内容から古典を追放せよなどということではなく、授業内容や授業方法を工夫して学生と知識との新しい「出会いの場」として講義を位置づけることである。様々な情報メディアの普及により、情報伝達の場としての講義の存在意義が問われかねない状況となったとしても、教員と学生が向き合う新しい「出会いの場」であるかぎり、大学の講義の意義が失われることはないであろう。

## 第11回FDフォーラム 開催趣旨・概要

平成18年6月7日(水)14時から17時まで、千里山キャンパス尚文館マルチメディアAV大教室において「教員表彰と教育貢献評価～よりよい授業をつくるために～」をテーマに開催した。第1部は、基調講演で、大阪産業大学副学長・FD委員会委員長 鈴木晶雄先生から「評価から改善そして開発に向けて — 教え上手な教員表彰制度と教育活動年報発刊 —」というタイトルで、大阪産業大学のFD活動の取組とその一環としての「教え上手な教員表彰制度」についての具体的な取組をお話いただいた。第2部は、パネルディスカッション形式により、文学部、社会学部、外国語教育研究機構の各先生方と受講学生諸君に参加していただき、「学生にわかる授業を目指して」というテーマで、授業方法とその環境について議論をした。これらの議論で、教育貢献評価は難しさとその必要性が明らかとなったといえる。

### 第1部 講演要旨

#### 評価から改善そして開発に向けて — 教え上手な教員表彰制度と教育活動年報発刊 —

大阪産業大学教授 鈴木 晶雄



#### ◎教え上手な教員表彰制度について

出席は取らない、騒いでいても私語は注意しない、遅刻や途中退席も自由、飲食も注意されず、休講が多く補講も行わない、さらに難しいレポートは出さない、試験も持ち込みで超簡単、単位は取りやすく、それもS(A)評価を乱発し、押んで手を合わせていれば単位がもらえる、まるで神様仏様〇〇先生と呼ばれる先生が学生にとって本当によい授業を提供する教員？

それは大きな間違いである。多くの過去のアンケートから以下の回答を得ている。1. 出席点は考慮してほしい（大学に来る意欲が喚起される）。2. 私語は先生が注意して絶対にやめさせてほしい（うるさすぎる）。3. 教員の教える技術をもっと磨いてほしい（下手くその一語に尽きる）。4. とにかくわかりやすい授業内容にしてほしい（難解で理解できない）。5. わからない学生を小馬鹿にしないでほしい……などの意見がアンケート結果では圧倒的に多かった。このようにキャンパスは極めて真面目で強い勉強意欲を持った学生諸君で溢れかえっているのが現状で教員としては嬉しい限りである。

前半の出席点や私語の問題は初期段階のFD活動でよく取り上げられたテーマのため熱心に議論され、色々な工夫が紹介され実践されるに至っている。また後半の教員の教える技量については、多くの大学の授業評価アンケートで質問項目にあがっている。

このように現在FD活動が定着したおかげで、ほとんどの教員が学生からなんらかの授業に対する評価を受けているが、残念ながら改善に結びついていないと言いが難いのが現状である。ある大学で学生と教員の両方に授業に関する相談室を開設したところ、教員からの相談も予想以上に多くあった。このことは学生からの評価を真摯に受けとめた教員が次にどのように改善すべきか真剣に悩んでいることを示唆した結果と受け取ることができる。すなわち、学生にとってよい授業を提供する教員全体のお手本となるような模範教員が行う授業の見学や教員間での教育活動に関する情報交換を望んでいることの表れではないだろうか。

そこで、大阪産業大学では平成17年度から「教え上手な教員」を表彰する制度を発足させた。発足に際してまず確固たる表彰制度の基本構想を決めた。それは「教え上手な教員」に投票できる者は教職員を除き学生のみにしたこと、および選出基準は極めて単純にとにかく「わかりやすい授業」を提供している教員としたことである。詳細な方法論については省略するがインターネット投票などが簡単にできる便利な時代であるため問題なく本制度を導入することができた。

特に学生のみ投票させることについては、学生との信頼関係が基本となるため議論を呼んだ。しかしながら、学生を信じることを前面に打ち出したため、結果的に学生には好印象を与え信頼関係の絆がさらに深まるという副次的な効果まで生み出した。

平成17年度は約100名の教員がノミネートされ選考委員会で9名の教員が選出された。表彰式では、9人9色で9通りの授業方法が紹介されたが、9名に共通する点は基本構想の狙い通り学生にとって、とにかく「わかりやすい授業」を実践していることである。

当初、この「わかりやすい授業」の定義が曖昧との指摘を受けたが、その後の授業見学会に出席すれば一目瞭然で、とにかく「わかりやすい授業」を心がけ、教え方が丁寧且つ精力的で熱心に学生のために授業している教員を学生諸君は間違いなく選んでいた。

### ◎教育活動年報発刊について

本学でのFD活動の次のステップとして、つまり「評価」から「改善」そして「開発」の段階として、「教育活動年報」の平成18年度発刊を目指した。既述の「教え上手な教員表彰制度」は優れた模範教員を発掘しその教育手法を広めることが主な趣旨であるが、この「教育活動年報」の発刊は、学内の多くの教員が開示した教育方法の情報を個々の教員が共有し、それを参考に新たな授業方法を開拓することを目的とした。

本学には教育活動に熱心な教員、例えば、教育方法に独自の工夫をしている教員、学生との接し方に人一倍苦勞している教員が多く在籍している。これらの個々の取組の発掘と事例紹介は、FDフォーラムで始められているがごく一部の紹介に留まり、まだまだ緒についたばかりで決して完全なものではない。また、今までに教員の教育活動に関するデータや資料が統計的に収集されたことはほとんどない。

そこで、FD委員会が中心となって教員の教育に関する種々の取組を集め「教育活動年報」として発刊し個々の教員が実践している優れた教育活動を他の教員にも紹介し、全学的な教育活動の活性化を狙った。その結果、平成18年度分は192名の教員から詳細な情報が寄せられ無事発刊することができた。

今後は毎年発行する教育活動年報を通して教員全体に情報提供を行い、各教員の教育法開発に供し、そこで新たに開発された教育方法も貴重な情報源としてさらに開示していきたいと考えている。

### ◎最後に

FD活動のかなめは、決して外圧の力ではなく自発的な原動力を持たなければ継続力を失い教育効果の向上は望めない。そのためにも組織的な教員間の情報交換が不可欠となり、大学間の枠を超えた取組が必要となる。その意味でも今回の関西大学FDフォーラムにて基調講演をさせて頂いたことに改めて深甚なる謝意を表して締め括りたいと思います。

(大阪産業大学副学長・FD委員会委員長)

## 第2部 概要報告

澤井繁男文学部教授、永井良和社会学部教授、靜哲人外国語教育研究機構教授の3先生方と各々の先生方の講義等を受講している(していた)学生諸君の参加のもと、「学生にわかる授業を目指して」でパネルディスカッションを行った。まずは各先生方の教育実践について、授業方法の工夫も含めてお話いただいた。その後、受講学生からの意見や提案を受けた。それらの意見、提案を軸に、パネラーの先生方、受講学生、フォーラムに参加された先生方、さらに大阪産業大学の学生からの意見・提案もあり、積極的かつ前向きな議論が進められた。結論はもちろん出ないが、教員(授業するサイド)と学生(授業を受けるサイド)との教育に対するベクトルが概ね同方向を向いていることは確認できた。これは大きな成果である。これを生かして更なる「わかる授業」を展開できればと考える。最後に、パネラーの先生方と学生さん、さらにご参加をいただいた方々に有り難い議論が出来たことに感謝する。

### 学生にわかる授業をめざして

文学部教授 澤井 繁男



「わかる授業」をするためには、教える側がその教科をほんとうに理解していなくてはならない。これが案外、忘れられている。相手にある学問の内容を伝えるためには、教師はいつもの学識と経験を有している必要がある。声量・講義のスピードといった要素も大切だが、学問的知識が確固たるものでなくては、教師自身が自らを欺くこ

とになりかねない。

そのためには、授業の一回性が大切になってくる。言い直しが利かない状況に自分を追い込んで、適度な緊張の下で授業を展開する。板書を用いた、従来からの素朴な授業をしている分には、ごまかしがきかない。学生と面と向かい合っている場で、こちらの身振りや仕草が見られている

のであるから、のんきなことは言っておれない。

むずかし理論はなにもない。ただ、授業展開として、メリハリがきいていること、黒板の字が大きくて読みやすいこと、話の間合いの取り方、教師の立ち位置の案配などの考慮・技術は必要であろう。

また、さらに重要なのは、授業にはそうした技量に支えられた「内容」が伴っていることである。中身の無い授業はおもしろくないし、スキルだけなら専門学校でもまなべよう。大学はその種の学校とは異なる場であり、深い内実が求められる。もちろん、教える教科にもよるが、文化論などを教授する場合には、「内容」が優先されよう。

教師は司会者の役目もつとめながら、教室の雰囲気を読み取り、自在に弁をふるって、学生とひとつになって、一定の時間内でリズミカルに教室を運営していくのがよい。

教師にも才能がいる—これは極論だが、教えることをまず好きになってほしいとおもう。そこから、「わかる授業」へのステップははじまるのではあるまいか。

### 授業改善は機械化ではない ～停電に負けない授業～

社会学部教授 永井 良和



授業のあり方を改善していくことは、もちろん悪いことではない。改善の方向性を見極めるためにアンケートなどの調査を実施し、データの分析にもとづいて、具体的な改善プランを策定し、実行する。組織的で堅苦しい取り扱いとは別に、教員個人が日ごろ学生と接するなかで、その要望を受けとめて、改良のための工夫をする。そう

いった積み重ねが、授業をよくしていく。—だが、このような「前提」こそが再考されるべき時期ではないか。

組織的対応について、たとえば、黒板での情報提供よりプレゼンテーション・ソフトを用いたほうが教育効果上がる授業もあるだろう。しかし、そうでない形態の授業もある。いっぽう、大学の施設は予算が執行されていくことで更新される。パソコンを用いてプレゼンテーションがで

きるようになるのはプラスだが、黒板が使えなくなることはマイナスである。いまのところ、既存の教室から黒板を撤去するような事態にはいたっていないが、新設の教室ではホワイトボードとプロジェクターしか設置されないことがある。

情報伝達は、電気がないとできないのか。マーカーのような特殊な筆記用具がないと、教えるということは不可能なのか。私は、そうは思わない。停電や故障で授業ができないとすれば、それこそ、改善すべきは授業をする側の姿勢である。パワーポイントのハンドアウトを印刷して配布してもらわなければ、筆箱から筆記用具さえ出そうとしなければ、それは学生の側の意欲や能力を削いでいることになる。

新しい設備に、教授方法を合わせていだけ求められる方向性ではないと思う。液晶画面ではなく学生の目を見ながら話すこと、そして学生たちが自らの意志でノートをとるような姿勢を保つことを、私は、講義型授業では大切にしていきたい。



学問知識の「内容」の伝達を目的とする通常の講義科目と異なり、運用能力のトレーニングである外国語の授業には、「わかりやすい、わかりにくい」という次元自体がなじまない。なじむのは「力がつく、つかない」という次元である。ではどうしたら外国語の運用能力がつく授業になるかといえば、私の考えでは3つある。

ひとつめは「その題材の日本語訳があらかじめ学生に配布してあっても何の支障もないようなスタイルで授業を行うこと」だ。従来の「講読」は当然失格である。訳があってはやることなくなくなってしまう。しかし授業中は題材を自分なりの英語で説明したりさせたり、意見を言ったり、という活動が中心であれば、日本語訳は有用でこそあれ邪魔にはならない。

ふたつめは「教室に座っている90分間のうち、最低でも60分間は学生ひとりひとりに学習目標言語を口にさせること」だ。90分間のうちひたすら日本語を書き取っているような授業では、たとえ100回受けても上達するはずがないことは誰でもわかる。ペアワークの多用により、50人クラスでも、各学生が60分間はなんらかの英語を口にしているような状況を作り出すことができる。

そして最も重要なのが「とにかく学生を暇にさせないこと」だ。現在の平均的大学生には、授業中はいつ当てられるかわからないし、当たったときうまく応答できなければ成績に響く、というプレッシャーを常にかけておくことが必要なのである。このために役立っているのが音読、応答等、およそ学生が授業中に行うすべての行動をその場で評価・記録・集計するためのExcel VBAによる自作プログラム InClassRater である。ラップトップPCを持ち込んで使用するので教室環境を選ばない(図1、図2)。

こうして、だらけていては出せないパフォーマンスを引

きだし結果的に学生の英語力を向上させるのが、私の考える日本の大学環境で最も有効に機能する外国語授業である。



図1: InClassRater の初期画面



図2: InClassRater で学生を指名したときの画面

## 商学部 茂木 陽子

今回のFDフォーラムに参加して、大学が熱心に授業改革に取り組んでいると言う事を知りました。大学に入学してから、教育に熱心だと思える先生はごくわずかしかいないと感じていました。しかし、私の出会ってない素晴らしい先生方が大勢いらっしゃるのだという事をこのFDフォーラムで知り、大変嬉しく思いました。そういった先生方の下で勉強したいと強く思いました。今回私は運よくこのフォーラムに参加できましたが、他の学生にもこういった大学の努力をもっと知ってもらい、教える側と教えられる側の両方が活気に満ちて質の高い授業を作っていければ、と思いました。

## 社会学部 佐藤 慶子

今回のFDフォーラムでは「教員表彰と教員貢献評価～よりよい授業をつくるために～」をテーマに何人かの先生に独自の取り組みをお話していただきました。まず始めに、大阪産業大学の鈴木先生から学生にとって本当に教え上手な教員とはどういう人物なのか、そして大学でのFD活動についての講演がありました。私も以前から感じていた事ですが、大学には大変なことになる授業と、出席しなくても単位がとれる授業があります。そして関西大学でも授業評価アンケートが行われていますが、大教室に3、4人しかいない授業であっても良い評価をされる場合もあれば、為になる授業であっても真面目に聴いていない学生に悪い評価をされることもあります。このような評価制度に本当に意味があるのだろうか、と前々から感じていただけに、関西大学でもFD活動をもっと議論され、取り入れられるべきだと私は思います。次に、実際に授業で工夫している事柄について、3人の先生方からお話がありました。普段は何げなく受けていた授業ですが、それは先生方1人ひとりの教育に対する考え方や常に学び続ける姿勢、そして向上心の上に成り立っています。こういった先生方の熱意や努力は、今回のFDフォーラムに参加していなければ知ることができなかったかもしれません。しかし、授業をより良いものにするために、まずは私たち学生が先生方の思いをしっかりと受けとめ、それに答えていかなければなりません。つまり、良い授業は教授と学生が一緒に作っていくものだという意識を持ち、前向きな意見を交換する必要があります。そして一部の先生だけではなく、もっと多くの先生方、学生がこのようなフォーラムに参加し、積極的に授業づくりを行おうと思えることが、授業をよりよくするための第一歩であると強く感じました。

## 文学部 藤井 明子

今回のFDフォーラムにパネリストとして参加し、授業改善の取り組みが行われていたことをはじめて知りました。会場を見回してみても、学生は見当たりません。日々の授業において質の向上を測る素晴らしい活動であるにも関わらず、学期末に実施されている授業評価がFD活動の一環との認識が低いからではないかと思いました。大学HPだけでなく、インフォメーションシステムにも公開し、もっと学生と歩み寄るべきではないでしょうか。